에는 仰蓮花文이頸部에는寶相唐草가 爐身에는 覆單蓮瓣紋 빗꽃살紋 寶相唐草文 등이 둘러있다。底面에도 唐草文 蓮花文 菊花文이 보인다。그리고 各文樣의 限界를 마련하기 위하여 條線 櫛文 珠文의 順으로 配置되어 있다。銘文은 完全히 判讀을 못하였으나 낮은 細刻의 楷書로서 左向右回로 口緣面에 있다。

八公山寶賢○?施主催㞢?勿麻?主台 □□□□□□坐低德非公謙

製作年代는 文樣에서 보아 大體로 前述한 高杯型、香爐와 同代의 것으로 推定되는듯하다 獸足(一足은缺)의 彫刻 亦是 매우 졸열하고 退化된 彫法을 보이고 있다。本來 뚜껑이 있었던 것으로 傳한다。

寸數는 다음과 같다

高杯形 香垸

總高 二八・六cm 身高 一四cm 內徑 二四cm 口周緣徑 三二・八cm 口緣幅 五・八cm 身深 一三・五cm 臺座高 一四・六cm 臺圓盤徑 二〇・三cm。

鼎型陽刻文 香爐

總高 一七・五cm 口徑 一三・三cm 身高 九cm 身幅 一七cm 足高 六・五cm。

〔註〕佛教學報 第一輯「高麗靑銅銀入絲香院의 硏究」에 紹介되어 있는 表忠寺香院의 形式과 類似하다。

高裕燮君

上野直昭

私がヨーロッパから歸って、京城大學へ赴任したのが、開學に一年後れて、昭和二年の四月であった、前年の大正十五年に、大學は開學發足してゐるので、學生は己に二回目の入學であり、其內に高裕燮君がゐた、初めて君とあったのは、私の赴任後間もなく、敎官學生の合同の會で水原へ一日日返り、の遊覽をしたことがある、其時新入の學生であった君に紹介されたときで、其時己に中々の秀才である由をきかされたし、又美學を專攻するつもりといふことであった。爾來三年間は學生とて、君の卒業論文を審査もしたが、これをすますと、私は再び渡歐することになって、六年の秋再び京城にもどったときには、君は己に開城の博物館長になってゐたのではなかったか。其處で君は非常に勉强したらしく、塔に關する著書を貰つた記憶がある。京城大學に於ける半島生れの學生は優秀なのが少くなかったやうであるが、高君は特にすぐれてゐたのではなかったか。己に三十年き前のこととなるし、私も老いたので、多くは忘れて了ったが、開城の博物館に君を訪ぬたことも一度あったことを想い出すのみで、どんな話をしたかも忘れて了った私が京城を引上げて大阪にゐたある時、高君が文部省で行はれた學術の發表會に出張して來て、君の受けもった發表の講演が長くなり司會者が時間切れを宣告しても、もう少しもう少しと言ひつ、話しつゞけたといふのを誰れかに傳へ聞いた、ことがあったこの時の往路に、自家製らしい甘いものを持って來てくれ、己に物資殊に甘味の不足してゐた頃ではあり、大に感謝したことであった。

一般に、そんな逸話を作る方の人ではなく、地味な學者風の人ではあり、私との接觸も左程深まることもなく、こっ〳〵と眞面目に勉强して居た風であるから、さて想出となるとこれといふ程の種子もない。突然死去の電報を受けてあ然としたことであったが、後に勉强し過ぎといふ話もきいて、思ひあたる點もないでもないが、惜しい人であった。

(三九、六、一四)

又玄 高先生의 二十周忌를 맞이하여

秦弘燮

今年 六月 二十六日은 又玄 高裕燮先生의 二十周 忌日이다。一九四四年